

Title	学力格差を是正する学校文化に関する臨床社会学的研究—効果のある学校のエスノグラフィーから—
Author(s)	西, 徳宏
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77580
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (西 徳宏)	
論文題名	学力格差を是正する学校文化に関する臨床社会学的研究 —効果のある学校のエスノグラフィーから—
論文内容の要旨 本研究では、日本社会の格差拡大による子どもの貧困の増加、それに伴う学力格差の顕在化を問題意識として、継続性がある「効果のある学校」である公立X小学校の学校組織文化をLPP論によって分析することで、学力格差を是正する学校文化が成立し継承されるプロセスを検討した。 第1章「先行研究の検討と研究課題の設定」では、公正な学校教育の実現を目指す「効果のある学校」研究を検討し、研究課題と分析枠組みの設定、そして本研究が置かれる学問的文脈について整理をおこなった。その中で、これまでの日本の「効果のある学校」研究では、「効果のある学校」の学校文化の成立と継承のプロセスに焦点が当てられていなかったこと。その課題を解決するために（1）継続性がある「効果のある学校」の析出と特徴の検証、（2）学校内部の組織体制と学校外部の諸機関の連携構造の分析、（3）「効果のある学校」の教員集団の職業的社会化のプロセスの解明、の3点を検討することが必要であることを指摘した。 第2章「継続性がある効果のある学校の析出と特徴—学校・子ども・保護者調査から」では、大阪学力調査を活用して継続性がある「効果のある学校」を析出した。その結果、特に基礎学力達成水準が高く安定した学校効果を見せた公立X小学校を、本研究で扱う「効果のある学校」とした。第2章は継続性がある「効果のある学校」を析出するという、各章の前提となる基本的作業を中心に行なっており、全ての検討課題の準拠点となる章だと言える。だが特に検討課題の「（1）継続性がある『効果のある学校』の析出と特徴の検証」に関連している。 第3章「効果のある学校の教育実践の特性—なにを受け継いでいるのか」では、X小における伝統的な教育実践を取り上げ、X小教育実践の実態を、X小の歴史的関係的文脈を踏まえながら、参与観察調査の手法によって明らかにしてきた。X小には、同和教育研究推進学校としての歴史的背景に基礎づけられた教育実践が継承されていた。本章のテーマは特に、検討課題の「（1）継続性がある『効果のある学校』の析出と特徴の検証」に関連している。 第4章「学校組織文化の内部統合と外部適応—どのように受け継いでいるのか」では、X小の学校効果を継続させる要因として、学校組織文化の内部統合と外部適応の構造と機能について分析を行った。特に「（2）学校内部の組織体制と学校外部の諸機関の連携構造の分析」の検討課題と対応している。 第5章「解放教育のアイデンティティーなぜ受け継ぐのか」では、X小教員集団における熟練のアイデンティティが形成されていく教員の組織的社会化のプロセスに、実践共同体に存在する定型的な物語へのナラティブ・アプローチによって接近した。本章のテーマは検討課題の「（3）『効果のある学校』の教員集団の職業的社会化のプロセスの解明」に該当する章である。 第6章「教育実践の継承をめぐるコンフリクト—なにが問題か」では、教員の組織的社会化と学校組織文化の再生産の過程で、成員間に生じるコンフリクトが有する再帰的影響を、X小が埋め込まれる社会的文脈にも着目しながら、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。本章のテーマは特に検討課題の「（3）「効果のある学校」の教員集団の職業的社会化のプロセスの解明」に該当しているが、各章で分析された検討課題の（1）や（2）の蓄積の上に成される分析である。 こうした分析の結果から、学校組織文化の再生産と教員の組織的社会化は、そこに意味の正当性をめぐるコンフリクトを常態的に内含し、成員同士の絶え間ない相互調整によって集団がつくりかえられつつも再生産されていく、動態的かつ永続的な学習のプロセスであることが見出された。そこから、教育行為をめぐる成員間に生じる緊張関係と積極的な相互調整によってその解消を目指す、新たな効果のある学校像や教員像が提示される。この点は、学校文化や教員文化の協働性のみを強調してきた従来の「効果のある学校」研究や、若手教員が既存の文化を自明的に受容することや個人のストラテジーを強調してきた、これまでの教員研究では見落とされてきた側面である。 終章では、こうした知見が持つ学術的・政策的・実践的示唆について、まとめと考察を行った。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (西 徳 宏)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	志水 宏吉
	副 査	教 授	千葉 泉
	副 査	教 授	高田 一宏

論文審査の結果の要旨

本論文では、日本社会の格差拡大による子どもの貧困の増加、それに伴う各力格差の顕在化を問題意識として、継続性のある「効果のある学校」とみなされる公立X小学校の学校組織文化を正統的周辺参加論によって分析することで、学力格差を是正する学校文化が成立し継承されるプロセスを検討している。本論文は、6章からなる。

1章では、「効果のある学校」研究を中心とする先行研究が整理され、研究課題と枠組みの設定がなされる。設定された課題は、1) 継続性がある「効果のある学校」の析出と特徴の分析、2) 学校内部の組織体制と外部諸機関との連携構造の分析、3) 教員集団の職業的社会化のプロセスの解明、の3つである。

1) の課題が追究される2章では、基礎学力の水準の高さと安定した学校効果から、X小学校を継続性がある「効果のある学校」と判定できることが論証され、続く3章では、長期にわたる参与観察調査のデータから、その教育実践の特徴が、①「よさ」を引き出す集団づくり、②進路保障としての基礎学力保障、③系統的な人権総合学習の3点に整理される。

2) の課題がテーマとなる4章では、X章の内部統合と外部連携の在り方が探究された。前者では、①多層的なリーダーシップを実現する「フリー」の存在、②学年会による協働体制の構築、③学び合う機会をつくる多彩な校内授業研究会、後者では、①学校をつなぐ人権教育ネットワーク、②コミュニティをつなぐ地域教育ネットワーク、③人権交流センターによる社会教育福祉ネットワークという特徴が見出される。

3) の課題は、5・6章で考察されている。まず5章では、教員集団の熟練のアイディティティ形成のプロセスを探るために、ナラティブアプローチが採用され、「解放教育のモデルストーリー」と呼ばれるものが析出される。続く6章では、学校組織文化再生産の過程で成員間に生じるコンフリクトが有する再帰的影響がグラウンディッドセオリーの手法を用いて分析され、成員同士の相互調整によって集団が再生産される過程が描出される。

本論文は、日本でこの20年ほどにわたって展開されてきた「効果のある学校」研究を大きく進展させるものである。約10年にわたるフォールドワークによって蓄積されたデータの量と質は群を抜いたものであり、幅広く目配りされた内容構成と着実な論理展開により、従来の研究の知見を大きく超える新たなファインディングを生み出すことに成功している。その研究成果は、「学校文化の社会学」「教員の社会化研究」「学校の臨床社会学」「マイノリティ教育研究」等の諸ジャンルにも少なからぬインパクトを与えるに違いない。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断する。